



ポルトガルを世界に飛躍させたエンリケ航海王子

(1394—1460)

大国であったポルトガル

イベリア半島の大西洋側にあるポルトガルの人口は約一〇〇〇万人で世界八八位、国内総生産は二五〇〇億ドルで四七位、国土面積は九万平方キロメートルで一一位という目立たない国家です。しかし、五〇〇年前には世界を二分する大国でした。一四九四年にローマ教皇アレクサンデル六世の勅書により、新規に発見された土地は大西洋上の中央の子午線より東側はポルトガルの領土、西側はスペインの領土と決定されてきたからです。

その名残は南米大陸に存在します。現在、そこには一二の国家がありますが、国語は一一カ国がスペイン語で、ブラジルのみポルトガル語を使用しています。それはトルデシリャス条約と名付けられた上記の勅書が成立した直後の一五〇〇年にポルトガルの船団がブラジルを発見しますが、そこは世界を二分する子午線の東側に位置していたからです。さらにアフリカ大陸や東南アジアにも同様の理由でポルトガルの領土が点在していました。

この世界帝国の出現に貢献した人々を記念するモニュメントがポルトガルの首都リスボンの川岸に建造されています。帆船を表現する高さ五二メートルの巨大な彫刻は「発見のモニュメント」と名付けられ、東側に一六名、西側に一五名の彫像が設置されています(図1)。それらはV・ダ・ガマ、B・ディアス、F・マゼランなどポルトガルを世界に飛躍させた人々ですが、その先頭に屹立しているのが、発展を指揮したエンリケ航海王子です。

武勇で活躍した王子

現在、ポルトガルとスペインが存在するイベリア半島は、かつてキリスト教国とイスラム教国の衝突の frontline でした。七世紀初期にアラビア半島に登場したイスラム教徒はアフリカ北部を征服しながら西進、七一年にジブラルタル海峡を横断してイベリア半島に上陸し、一時は半島全体を支配します。スペイン南部のグラナダにある世界遺産のアルハンブラ宮殿（図2）はイスラム様式の建物ですが、それは上記のような背景があるからです。

そこで八世紀初期からキリスト教国がイスラム教徒からイベリア半島を奪還する八〇〇年近い闘争が開始されますが、これはレコンキスタ（国土回復）と名付けられています。その経緯は省略しますが、今回の話題に関係するのが現在のポルトガルの



図2 アルハンブラ宮殿



図1 発見のモニュメント

位置に一三八五年に成立したポルトガル王国アヴィス王朝です。初代国王はジョアン一世で、その三男として一三九四年に誕生したのがエンリケ王子で、「発見のモニュメント」の先頭の人物です。

エンリケは二一歳になった一四一四年、父親とともにジブラルタル海峡の対岸のアフリカにあるイスラム勢力の拠点セウタの攻撃に参加します。この戦闘での活躍はエンリケに騎士の称号と公爵の地位をもたらしますが、それ以上に偉大な歴史を開拓する運命を若者にもたらしました。西欧社会からは未踏であったアフリカ大陸の西岸を探検することや、さらに大陸の南端を周回してインドへ到達する航路を開拓する野望が芽生えたのです。

王子の村落を創設

この野望を実現するため、遠征から帰国した一四一六年にポルトガルの国土の最南西端で大西洋に突出したサグレスという場所に「ヴィラ・デ・インファンテ（王子の村落）」という施設を建設しました。ここは一五八七年になって、有名な海軍提督F・ドレークの指揮するイギリス艦隊の襲撃によって完全に破壊されてしまったため、現在では詳細不明ですが、大型帆船の設計と建造、船乗りの訓練、地図の収集などをしていたとされています。

大型帆船では三本マストの「カラベル」を開発しアフリカ沿岸の航海に利用しています。地図は資金を投入して収集しました。現在でも海図は外国の人間に販売しない国々もありますが、当時は国家機密でした。ドイツの作家S・ツヴァイクの小説『マゼラン』に、マゼランが世界一周を決意したのはポルトガル王室の秘密文庫秘蔵のドイツの地理学者M・ベハイムの世界地図を一瞥できたからという文章がありますが、当時の状況を象徴する挿話です。

マデイラ諸島の発見

紀元前五世紀の古代ギリシャの作家ヘロドトスに『歴史』という史書がありますが、そこに地中海域で活躍していたフェニキアという海洋民族の船団が紀元前七世紀に紅海から出発してアフリカ大陸の東岸を南下し、南端を回遊して西岸を北上してジブラルタル海峡を通過して三年かけてアフリカ大陸を一周したと記載されています。この真偽は長年検討されてきましたが、海流や風向などから判断して実話という見解が主流になっています。

当然、多数の文献を収集して研究していたエンリケもフェニキアの人々の航海は承知していましたが、当時の情報を収集するとアフリカ大陸の南部の土地は不毛であり、

海洋は沸騰しているというような状況でした。しかし不屈の王子は挑戦を開始します。最初の契機はセウタ攻略に参戦したJ・G・ザルコとT・V・テシュイラという二人の若者がエンリケに面会し、本国は不況で生活も大変なので仕事を手伝わせてほしいと依頼してきたことです。

そこでエンリケは二隻の帆船でアフリカ西岸を南下する航海を命令しました。二隻は途中で強風のため漂流しますが、偶然にもマデイラ諸島の小島ポルト・サントに漂着しました(図3)。位置はアフリカ大陸から六〇〇キロメートルの西方でした。帰国してエンリケに報告すると、もう一隻の帆船を追加して入植するよう命令されます。ところがウサギを野放しにしたため、二年で丸裸の土地になってしまい仕方なく帰国しました。



図3 ポルト・サント島

しかし不屈のエンリケは付近に陸地を発見するように再度航海させます。その結果、一四二四年にポルト・サントの四七キロメートル南側に奄美大島に匹敵する面積七四一平方キロメートルのマデイラ本島が発見されました。エンリケは本格開発を決定して人々を入植させ、木材の輸出とともにサトウキビやブドウを栽培させます。二五年後には八〇〇人が生活し、砂糖やワインを生産するようになります。これが有名なマデイラワイン誕生の経緯です。

カナリア諸島の発見

さらなる発見は本国から一〇〇〇キロメートル西方の大西洋上にあるアゾレス諸島です。エンリケの派遣したF・G・ヴェーリヨの船団が一四三一年に発見し、四五一年頃から入植が開始されます。九島からなり、合計面積は二三五五平方キロメートル

で大西洋上の中央に位置するため中継基地として発展し、現在は二四万人が居住しています。二一世紀になって紀元前二世紀までアフリカ大陸北部にあったカルタゴの人々が到来していた遺跡が発見されています。

さらにエンリケが目指したのがアフリカ大陸から一〇〇キロメートルの沖合にあるカナリア諸島でした(図4)。ここには一五世紀初頭からスペインのカステイリヤ王国が入植を開始していましたが、エンリケは一四二五年以降、三度も軍隊を派遣して奪取しようとはしますが失敗し、四八年には群島の一島であるランサローテを金銭で購入しますが、結局はエンリケの死後の一四七九年に全体は正式にカステイリヤ王国の領土となって決着します。



図4 カナリア諸島

アフリカ大陸西端に到達

そこで本来の目標であるアフリカ西岸の探検に回帰します(図5 アフリカ地図)。最初の目標はカナリア諸島の南側の北緯二六度にあるボハドル岬でした。地図では平坦な海岸のようですが、海中に岩礁が延々と伸長しており、岸伝いで航海していた時代には多数の帆船が難破している恐怖の海域でした。そこでエンリケは一四三三年に配下のG・エアネスに探検を命令しますが、エアネスは途中で帰還してしまいました。しかし、エンリケの命令で再度、挑戦し見事に岬越えに成功しました。



図5 アフリカ地図

ここでエンリケの冒険は一旦停止し、一四三七年にイスラム教徒が占領するアフリカ北部のタンジールに派兵しますが、フェルディナンド王子が捕虜になる失敗で、エンリケの戦闘指揮能力は不評となり、以後はアフリカ航路の開拓に集中します。その結果、四一年にはボハドル岬から七〇〇キロメートル南側のブランコ岬、四四年には、後年、アフリカ大陸南端に到達するB・ディアスの父親D・ディアスがアフリカ大陸の西端ヴェルデ岬に到達しました。

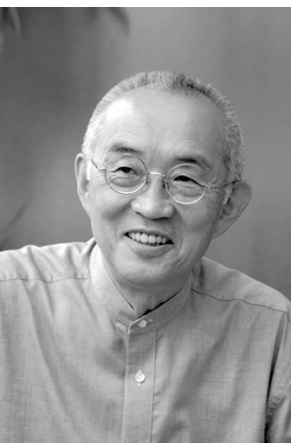
これによってポルトガルの船隊はアフリカ南部から金鉱を調達して帆船で大量に母国に運搬するようになり、ポルトガルの経済は発展し、一四五二年には最初の金貨が発行されるまでになります。さらに探検は進行し、多数の帆船がヴェルデ岬を中継地点として南下し、一四六〇年には現在のシエラレオネ付近まで到達するようになります。しかし、その一四六〇年にポルトガルを大国にしたエンリケは王子の村落で死亡しました。六六歳でした。

アフリカ大陸南端を周回

エンリケが目指したアフリカ南端の周回航路はエンリケの存命期間には実現しませんでした。一四八一年に即位したジョアン二世が意思を継承します。まず一四八八年にB・ディアスがアフリカ南端を発見します。ディアスの指揮する二隻の帆船は強風のため一三日間も漂流し、陸地を見失ってしまい、接近しようと東進しますが陸地が出現しませんでした。そこで北上すると左手に陸地が遠望できました。暴風に翻弄されて意識せず南端を通過していたのです。

一四九五年にジョアン二世が逝去し、後継のマヌエル一世が事業を継承してインドへの東回り航路の開拓を支援します。九二年にスペイン女王イサベル一世の支援でC・コロンブスが西回りでインド（実際はアメリカ）に到達したという航海に対抗するために、ポルトガルは東回り航路を発見する必要があります。そこで隊長に指名されたのがV・ダ・ガマでした。四隻の帆船からなる艦隊は一四九七年七月に盛大に見送りされリスボンから出航しました。

途中までは一〇年前にアフリカ大陸南端に到達していたB・ディアスが同伴しますが、ヴェルデ岬からは四隻になり、十一月にアフリカ大陸南端を通過し、陸沿いに北上、一四九八年五月にインドのカレクト王国に到達しました。以後、ポルトガルはアジアにも進出し、西洋の人間として最初に日本に到来したのはポルトガルのF・ザビエルで「発見のモニュメント」にも彫像が設置されています。ポルトガルは一五世紀には世界を二分する大国だったのです。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。